

## 福島第一原子力発電所 4号機の使用済燃料取り出し開始に際して ～廃止措置に向けた大きな一歩～

平成 25 年 11 月 18 日  
一般社団法人 日本原子力産業協会  
理事長 服部 拓也

いよいよ福島第一原子力発電所 4号機の使用済燃料プールに保管されている燃料の取り出し作業が開始される。福島第一原子力発電所 1～4号機の廃止措置に向けた大きな一歩と言える。平成 23 年 12 月のステップ 2 終了から 2 年以内を目標に進められてきたこの作業が、関係者の努力によって 1ヶ月前倒しで開始されることは、大きな成果であり、関係各位、とりわけ現場作業員の皆様の努力に敬意を表したい。

4号機は事故当時、定期検査中で、炉心から取り出された発熱量が多い548体を含む1,533体の燃料が、原子炉建屋内の燃料プールに保管されている。建屋は隣の3号機から流れ込んだと思われる水素による爆発の影響を受けており、その健全性を懸念する声も大きく、東京電力はプール底部の支持強化、定期的な建屋の健全性確認など安全確保に努めてきた。今回の燃料取出しにより、設備の健全性が確認された共用プールで燃料を冷却・管理することができ、国民の安心・安全と海外からの懸念の解消にもつながる大事な作業だ。

しかし、4号機建屋上部から多くのガレキを取り除き、燃料取り出しの準備は整ったとはいえ、燃料ラックの隙間に入り込んでいる異物がないとも限らない。十分な準備をしてきたものと思うが、常に「未だ見ぬリスクが現場には潜んでいる」ことを前提に、安全を最優先に取り組んでほしい。そして、この一つの節目とも言えるこの作業開始が、日々、苛酷な環境下での作業が続き、疲弊している現場のモチベーション向上にもつながることを期待したい。

また、先日設立された IRID（国際廃炉研究開発機構）に設置された国際エキスパートグループ（IEG）において、今回の燃料取り出しに関するレビューが行われたことは、この廃止措置作業を、国際的に開かれたプロジェクトで実施すべきという諸外国からの期待がある中で、評価できる取り組みである。こうしたレビュー結果とともに、作業の進捗に関する情報を広く国内外に公表し、安心につなげるとともに、作業で得られる知見、特に取り出した燃料に関するデータなどを広く共有し、世界の原子力安全の向上に貢献することが日本の責務である。

以 上